

昭和十八年

(七十二)

合掌 南無阿弥陀仏……(略)……

しかし今日一日御念仏申して暮して下さったことでしょう。誠に念仏申させて頂きましょう。「念仏申せよ必ず浄土に迎える」とは如来誓願であります。念仏申さずにいられましょうや、誓願であります。正覚成就の誓願であります。であります。念仏は誓願に衆生はその大悲の誓願を頂いて信心決定して念仏申すのであります。念仏は誓願の廻向であります。念仏は救いの条件ではなくて、如何なる者でも救うの誓願であります。

念仏申すのには愚者にならねば申されません。私は田舎の御同胞の方々が好きであります。愚かな人は念仏して浄土に往生致します。

拜まれる人になろうとするのが聖道門。人を拜むことが出来る人にして頂くのが浄土門。

念仏して一切を合掌の中に受け取ると言うことはなかなか出来ないことです。しかし誠に生ききらされた人は運命を御念仏の中に楽しんでいきます。

十悪五逆五障三従とさめて念仏申すことく。

はあちゃんは御達者で御通勤ですか。念仏に乗托して今日一日を精進なさい、と伝えて下さい。(以下略)

昭和十八年二月十日

夜晃

小春夫人御中

(七十二)

合掌 南無阿弥陀仏

承り候えば、この度、兼ねて御病氣御養生中の御令息様には、薬石其功德なく御往生遊ばされ候趣、驚入候。

御一統様の御愁傷奉拝察候。小生儀、御生前、遂に相遇うて、仏徳讃嘆の機会を得ざりしこと、誠に千歳の遺憾に御座候。さりながら、兼ねて、志を仏願にかけられ、御念仏の朝夕を撰取不捨の誓願に托せられ、最後に当つて、死を現前に諦観、凝視せられ、従容として、静に、恩徳感謝の中に大往生の素懐をとげ給いし由、誠に此事、希有最勝のことに候。芽出度き中に芽出度きことに御座候。

人としてこの世に生をうけ候こと、一難に御座候。

仏法に遇い難きこと、二難に御座候。

仏法に遇うと雖も、信樂受持する、難中之難と説かれ候えば、この三難を成就すること、誠に、希有中の希有。人間のはからの成就すべきところには御座なく候。

あとに残りし我らは、いよいよ、聞法精進、念仏一道に生きて、その残したまいし、一筋の道をたどり、やがて、お浄土に於いて、再会、法味樂を同じうさせて頂き度きことに御座候。

先は、書中を以つて御悔迄申述候。御一統様によろしう御鳳声被下度御願申上候。敬具

昭和十八年二月二十一日

住岡夜晃

福岡八郎様

(七十四)

合掌 南無阿弥陀仏………生死海は風の吹きまわし一つで急変します。風のな  
い日には眠りに陥り、風の荒い日には急変に驚いて運命をかこつのが凡夫の習いであ  
るのに、念仏の子は何という有難いことであろう。風の日には本願弘誓の大船の安ら  
かさを頂き、風なき日には却つて法筵にあつて生死無常を觀ず。

本願によつて動かず、名利心によつて動くは、汝自身空虚なるによつてなり。汝自  
身空虚なる時は、汝自身の存在すること自体、徳の香り、徳の光を持たざるが故に、  
三業の動きによつて汝の存在をして他に認めしめんとするが故に、いよいよ妄動し  
て、いよいよ汝の空虚さを暴露するなり。何をかなす前に汝の存在自体が何を云つて  
いるであろう、考えなくてはならない。

自らの存在を他に認めしめようとせず、花を人に持たせ、自らは埋れて自己を充実  
する者は、必ず顯われる。されば、名利心を深信凝視して、大法に忠実に本願の功德  
大宝海に聞入して念仏申すを生命としたまいし祖聖は、万世に顯れたまうのである。

「いづれの行も及びがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし。」すみかぞか  
し。幾度も幾度も拜誦すれば祖聖の御念仏の胸底にふれん。金殿どころか、小屋どこ  
ろか、名利どころか、地獄こそ住家として値する身なるを思えば、汝の今日の不平愚  
痴不安等々がいったい何故のものであるかがわかるであろう。

風になびく草の如く、本願の自然の徳風のままに動く心、大信海の全否定の相であ  
る。もしそこに硬直心あれば、本願の風通りたまわで我が通る。噫、風の中に立つ硬  
直なる棒の相、又してもく風に動かず我によつて動く。

静かにく己を見つつ念仏申す。今日も又暮れてゆく。

先日は御病人たちお困りのことでありました。よろしく皆様にお伝え下さい、お念  
仏申しましよう。

昭和十八年五月八日夜

夜晃

若どの

(七十五)

合掌 南無阿弥陀仏

旅より帰り御手紙拝見致し誠に驚き入りました。何だか私の気の狂いのような気がして幾度読みかえしてもやはり間違いはない。調市様には御養生かなわず四月三十日御往生遊ばしたとのこと、誠に何とも申様も御座いません。驚き入ったことでもあります。

諸行無常是生滅法の法語、世間虚仮唯仏是真の聖訓、身にしむことであります。御一統様の御悲嘆御愁傷ふかく、御察し致すことであります。田橋に於ける有力なる同胞の一員として私もまた力としていましたのに、あまりに早い御往生ではありません。思えば三月、周布に於てお目にあたったのが最初で、本部でのお別れが最後であり、その間二十日間ほどであります。この短い因縁が嬉しくも大悲につながりたもうたものであります。有難くも尊い因縁でありました。ましてやその間、本部の聖会にも出席して頂き、聞くべきを聞き、獲得すべきを獲得して、御往生なさったことであります。この点ばかりは悲しみの中の喜びであります。人生もとより長寿百歳を得とも何等得ることなき醉生夢死であるならば無意味のことでもあります。悲しむべきは調市氏ではなくて、後に残った者であります。今や我等は田橋の地より一人の希有華を咲かせました。これこそ真の同胞の力であります。真の念仏行者を一人浄土に送ればそれだけ地上の我等の歩みは和と団結と精進の力を得ます。美川の地の同胞はいよいよ御精進下さいませ。

御一統様によりしく御伝言下さいませ。先は謹んで御悔み迄申し述べさせて頂きました。御大事に御精進下さいませ。南無阿弥陀仏

昭和十八年五月十五日

夜晃

小川彬棋様

(七十六)

合掌 南無阿弥陀仏

先日は久々で御目にあたりまして誠に嬉しう存じました。ただの一日ではあつても何時にかわらぬ御求道御精進の御すがた有難く存じました。又御出発の朝には御心のあふれた有難い御手紙を頂き、その上尊い御芳志まで頂戴致しまして何とも御礼の申し様ありません。ここに有難く厚く御礼申し上げます。

一、事変下 陛下の赤子を保護し、その治安に任ずる警察官が御念仏を申し心中奥深く聖火を燃してその心を以て職務をはたして下さることは誠に有難いことであります。君が駐在する村人は喜んでいることでしょう。犯罪もとより許すべからず、威厳の尊ばるべきはもちろんであります。冷い法律のみでは人は悦服するものではないことは言うまでもないことあります。

一、誠に念仏して内を如来の徳によつて満され、自己を充実して日本国土の中に埋れさせて頂くのが我等同胞の覚悟であります。人知れず念仏してその職域に精進してこの広大の御恩を報じさせて頂きましょう。今や我等の同胞は各地各界にかくの如き念仏の世界を生き抜いて御奉公して下さることであります。誠に有難いとはこのことでもあります。

一、念仏の人を常行大悲の人と讃えられます。自らは知らずして大悲この人を通して人生に輝きたまうことであります。信心の自覚こそはたつた一つの如来浄土の光の人生を照す窓であります。合掌して念仏申すべきであります。

一、一家悉く揃つて念仏に生きられる君の家は誠に恵まれたことであります。御油断なく御精進下さる様御願ひ致します。

では御礼のついでに一筆書き添えました。御大事に精進下さい。さよなら。南無阿弥陀仏

昭和十八年五月十五日

山田誠次様

住岡夜晃

(七十七)

合掌 南無阿弥陀仏 先日は久々ぶりにお目にかゝることが出来て嬉しう存じました。御結婚後最初のことです。それは誠次君も一緒でした。御会い出来て御法を聞いて頂いたことを有難う思っています。因縁のある方が見出されて御結婚なされたこと誠に御芽出度う存じます。御説の如く、母上の御志を心として御念仏申し御家庭をお造り下さい。宗教のない世界が何であるかは、君の職務の上からでも明らかになることだと思ひます。

如来本願の眞実は、誠に合掌念仏のところ具体的に生きて、眞実人生の本質となつて下さいます。夫の心にも妻の心にも同一のこの久遠の眞実が顕現して下さい。ではじめて誠に同心一体となつて生きさせて頂くことが出来ることであります。奥さんを必ず講習に出してあげて下さい。尊い一生の出発です。聞くべきを聞き、知るべきを知り、こわすべきをこわし、棄つべきをすて、獲べきを獲て後に、はじめてほんとうの白道は生きられることです。それをせずして眞実を求めることは間違つています。

君はい、弟を持たれました。誠次君の眞剣な生き方には何時も打たれています。将来のある立派な警察官が生まれましょう。

有史以来の大非常時、未曾有の秋に生を皇国に頂いていること誠に有難いことであります。心中深く聖火を燃やしつゝけて、この大恩を報じさせて頂きましょう。奥様よろしく御伝え下さい。さよなら

昭和十八年五月十九日

夜晃

山田保重様

(七十八)

合掌 南無阿弥陀仏 先日は御便り有難う。御無事で御精進のことと存じます。例会もすみ、石井講座も有難くすみ、今日一日は休みである。明日は又□にゆきます。聞かれぬ日にいよく聞かれる身の上の有難さが身にしむことであろう。例会が一度ぬけるだけでも辛いのに、多くの同胞は年に二三日聞かれたら、それで喜んでゐるのだから。聞かれぬ日にこそいよいよ念仏申して精進することです。御念仏ほど尊いものがないことはかねて見聞する通りです。旅から旅に唯このことをのみ拝みます。今月の例会で自然法爾章はすんだ、摺筆の文もすみました。

「何がよい何が悪いこと云うことを書きあらわす文字さえ知らぬ人は、かえつて虚も飾もない素朴なまことの人である。それなのに善悪の文字を十分にしりもせず知りかほをして和讃を書いたりする自分はおおそらごとのかたちである。」

「何が是か何が非か何が邪か何が正かを知る智慧もなく小慈小悲もなき身が、ただ名聞利養の心にて人師をこのむ故に和讃を書いたことである。」

5

これが摺筆の文の意である。

何たる尊い卑謙の意であろう、三帖和讃なかりせば誠に我等は聖なるもののほんとうを知ることが出来なかつたであろう、それなのに聖人は誠にかくの如く卑謙せられてある。高慢なる我等の相の知られることではある、へり下つて父母につかへ念仏して一日も早く本部に帰りなさい。皆様によりしく御伝え下さい。別れていよいよ永劫に別れることなきを知る者は幸である。大悲本願の旅であります。

昭和十八年六月五日

夜晃

下岡静子様

(七十九)

合掌 南無阿弥陀仏

御無沙汰致して居りますがその後御経過如何でしょうか、御伺い致します。去んぬる五月二十七日には病床にあつて唯一席ではあつたが御法をお聞き下さいました。手術されてあつたらこそその聞法であります。一夕の聞法の価の如何にたかいものであるかを痛感せられたことであろうと存じます。三十一日には体のことを心配して早く帰つて失望させて相済まぬことであります。風邪で困つていたのですがもうよくなりましたから御安心下さい。目下は□に来て観経の講話をしています。一週

間程居るつもりです。久遠劫来の宿業を黙って念仏の中に受け取って、大地に合掌することほど安楽な生活はないのに、これほど難しいことはありません。到底大悲本願なくしては出来ないことであります。大悲法蔵は、兆載永劫かけて至心の真実によつて、一貫の忍終不悔の大精進を成就せられたことであります。その至心の真実がそのままに宿善開發して信樂の念仏となつて下さったのであります。至心信樂の御心においてのみ悪人とさめて大地に合掌して一切業苦を受け取らして頂くことが出来るのであります。

三世諸仏にすてられたと云われる業苦の衆生が、そのままに十方諸仏に護念証誠せられることは誠に五逆謗法の為にであり、又それにさめて念仏するが故であります。五逆謗法を内観自証して恭敬の心に執持して念仏するものは諸仏に讃嘆証護せられ、これを見ずこれを知らず、それ故に至心信樂の念仏に生ぎずして自力高慢なるものは、諸仏にすてられるものであります。諸仏はすてたまわずといえども、自ら諸仏をすてて逃げるが故に(教を受け取らぬことなり)すてられたことになるのであります。思い至れば極難信の法であり、易行の他力であります。

毎日念仏して体を養つていられることでありましよう。体を養うままが心を養つている貴女の毎日を有難く憶念して、私も亦念仏しています。

善導大師は禁父縁の最後の「顔色和悦」の語を釈するにあたつて

食能延命 戒法養神 失苦亡憂

と云われました。法養神こそ一大事であります。毎日御念仏の中に御会い致します。

御介抱の人によくお伝え下さい。お念仏致しましょうと。

御見舞の為にこの手紙を派遣致します。何も彼もこの便に御聞き下さい。体の具合はよく少しは肥えて来たようであります。御安心下さい。南無阿弥陀仏

昭和十八年六月九日

夜晃

中務美津代様

(八十)

合掌 南無阿弥陀仏 毎日〱雨でしたが皆様御変りはありませんか。五月初旬には二十周年講習会で有難う御座いました。長い間よく御精進下さいました。皆様御精進が実を結んだのです。いよいよ念仏一道に精進させて頂きましょう。

さて五月二十日夜から四日間、兵庫県の住吉支部にゆきましたら、本部の花田君と一緒に佐々木重人君が来てくれました。そして二日四晩の御話の中、一席かげただけで二日四晩聞いてくれました。仕事をやすんだのです。昔ながらの佐々木重人君でした。誠に嬉しう思いました。工場で誰かの話に広島県から徴用のお坊さんが来ていると聞いて会いに行つて見ると花田君だったのだそうです。大変に熱心に有難く聞いてくれました。そしてすんで帰る最後の時「長い間お別れしても先生を忘れたことはありません」と云つて泣いていました。私も大変嬉しう思いました。島田屋

の二人が聞いたら喜んでくれることだと思ひ、早く知らせたいと思いつゝ、とうとうおかれて今日になりました。住吉、大阪の支部がにぎやかになりました。長い間別れていても、「願の火」が消えずにいれば、又遇えるものであることをしみじみ感じました。一度聞いたものは本願力によつて然らしめられるが故に、火が消えてなくならないのです。

御念仏によつてお会いして、二十年という長い間、一緒に歩ませて頂いた有難い宿善のことを思います。しかしながら如来光明の御力であります。いよいよ大悲の御心にくもりをかけず御念仏し一道を精進させて頂きましょう。近頃口のおそろしさをつくづく思っています。念仏申させて頂く口です。口を大事に致しましょう。美しいと言ふのも口、悪いと言ふのも口、活かすも口、殺すも口です。

では御大事に御精進なさい。私の体は元気です。御安心下さい。

昭和十八年六月十一日

夜晃

島田屋皆様

(八十二)

合掌 南無阿弥陀仏

この間は長々滞留して御厄介になりました。そして御心づくし誠に有難く頂戴致しました。厚く厚く御礼申し上げます。師世がその後ひきつけを發したとのこと、まことに可愛想です。衰へた上に衰へた鶴枝さんが疲れきつてしまひはせぬかと心配します。どうか無理をせぬようによく気をつけて下さい。鶴枝さんが大病でも引きおこすと如何とも出来ないことになります。

秋作君から返事が来ました。その中には、「この度真情溢るる御注意を拝誦、只々感涙とゞめあえず一意御意に副う様、魂胆に銘じ仕り候、(中略)全身仰せのままに。小生の一身戒嚴の腹に候が余すところ無く精進一途今日死す覚悟に御座候、乃至今回中野送別に当つては村有志各位を始め、父兄殊の外惜しみ下され村初めての盛大なる儀と申す程愛情を賜り候。是と云うも委く兄の教の腹持ちたるもの滲み出されし御徳に他ならずと存じ、些少吾が智腕に俟たざるものに御座候…」と書いた有難い返事でした。とても嬉しう感じました。

この度の講座まことに心に満たぬことで申諾けのないことではありましたが、しかしほつと安心致しました、言うべきことは言いつくした気も致します。

人生の一つの事相を通して象徴の世界へと帰入すると言うこと、それを求めると言うことは無理なことである。げに象徴界への開眼、これこそは世尊の韋提の上に成ぜんとして成じ得ざりし宿題であつた。又韋提としては多年仏に師事すといえども、相對有限の樂に囚われて、象徴界への闊入の機縁なきものであつた。然るに今彼女は彼が肯定せる現実が、あにはからんや身動きもならぬ彼女の為の牢獄であつたことにさ

めるや、世尊は大悲方便によつて、その肯定的世界観の崩るるに随つて象徴界へとつれこまれたのである。

象徴的世界観に任ずるものは唯象徴即ち浄土莊嚴の撰取に安心し、願往生心によつて不退転の位に入る。撰取も念なり、願往生も念なり、念を念じて、念亦念ぜらる。かかる念仏こそは象徴世界自爾の徳の無限の莊嚴の内容である。そこには実体論的肯定の微塵も存在せぬ純粹円満なる不可思議界である。私は御地に至り象徴主義世界観の（これは畢竟外道なり）人を見た。「義」観は結局自己肯定の迷妄にすぎぬ、そこには心光撰護に安住する者の感謝なくして灰色に曇りたる倦怠のみあり。そこには熾烈なる願を認めずして、ただ外面的な社交の熟練のみあり、その言う所、一言のもとに自己肯定的なる独我のみなることを自白す。

鯀の善き人々は、その実体論的世界観の重圧の中に漸くさめんとして願の萌芽を蔵せる人、その謙仰の徳、象徴界に帰入して大海中の一華となりたまうべし。然るにもし人あつてあたかも象徴の大海に入れるが如く装うて、内心には実我実体論的肯定の蔵するにさめず、それ故に生ずる偏見を信の衣によつて包み、擬装して世に売ればその害毒おそるべきものなり。

念仏するにしかず 彼の仏に八万四千の相あり

一一の相に八万四千の好あり 一一の好に八万四千の光あり

一一の光明遍照十方世界 念仏衆生撰取不捨

南無阿弥陀仏…………… 噫広大なる哉、象徴の大海

念仏するに如かず 念仏するに何ものの妨げなし

帰入功德大宝海 法海一音声

南無阿弥陀仏

つる枝さんによろしう云つて下さい。休めく。眠れく。肉体疲れたるといへども聞名信喜の願光る。有難し、つる枝さん。休めく、体を労しすぎるなかれ。みい、ふうとの二女性によろしく。御念仏申せと。

昭和十八年六月十八日

夜晃

めばる殿

酔狂に福井さんの念仏をやゆしたまうこと勿れ。讚嘆念仏は至嚴の一仏乘なり。

(八十二)

合掌……………(略)……………徳泉老が胃潰瘍と胃癌とで病篤との知らせで七日に一夜どまりで今生の御別にゆきました。とてもく、よろこんでくれました。其夜はモヒの注射で痛みをおさえて夜更ける迄大法をお伝えしました。又有難いことを聞かせてくれました。近頃又蛋白が多いのですが、それでも七十一になって叱られてくれるような人は又とあるまいと思つてわざく、石州に行つたのでした。最後になつて「おち



てゆく無間の其処（底と其処と通ずる心）も里の春」と一句を書いて渡してくれました。あわれ十七日にはお浄土にかえりました。毎日悲しんでおります。しかし芽出度いことであります。み親のみもとで尊いことになってまいりましょう。

近頃しみじみとお浄土迄共にゆける人、お浄土で又会われる人、その人のみがこの世でも真に会っているものであることをしみじみと思われれます。又その人は地上の希有人であることがしのばれます。病氣したり災難に合ったりして、世の真相、人の心のほんとうのすがたを知らせて頂いて有難く念仏しています。今も階下から槌の音がしています。江州の本覚寺は六日に本部に来て労働服を着て働いていてくれます。先日荒堀がつかまりましたが、土をねったり運んだり、かげながら拝むことであります。おかげで大分かたづけました。昨日畳が十四枚配給されました（六十何枚くさりでした）。十一日の聖会迄には復旧すればいゝかと案じています。紙が配給されないので障子が張れません。生死の大海であります。異変があるのがあたりまえです。一つ一つ業を受けさせて頂いて、みくにに召されることであります。お念仏申しましよう。

昭和十八年十月十九日

中務美津代様

夜晃

（八十二）

合掌 南無阿弥陀仏 度々御便有難う存じます。承れば先月の大洪水には黒沢も大被害を受けたとのこと、御寺の前の田は山崩れし、為に無くなったとのこと、誠に驚入ったことです。特に御隣寺には内陣迄土砂が流れこむなんて想像も及ばぬこと、喜んだ豊年は一日にして又侯凶年と変わりはたつとのこと、限りなく続く民族への試練ではある。しかし幸にも貴地には生命の異常がなかったことは何よりでした。斉藤法姉の御一家誠に気の毒でした。

内憂外患に埋れた日本の現実ではあるが、これは大和民族の上に成就すべき大使命の広大を知らしむるもので、決してこれにまけることなく、念仏の中に受け取って雄々しく超克すべきであります。日本の強さは日本が決して温室でなかったが故である。

一も信、二も信、遂に念仏一つに徹すること、これ今家不動の一道なり。

念仏より外に日本を救うものなし。念仏道ましまさぬ世界は、表面忠君愛国を絶唱しつつ闇ますます深し。この銃後の闇黒こそ敵の乗ずる唯一の手掛りである。誠に深憂にたえぬものがある。黒沢の念仏化は、島根の念仏化であり、やがて日本の念仏化である。たのむぞ。

今度会うまでに歎異抄総結の文「弥陀の五劫思惟の……念仏のみぞまことにておはします」迄を幾度もくり返して拝読しておくこと、そこに必ずわからぬところが一ヶ所ある筈。

以上御見舞に一口書添へました。南無阿弥陀仏

昭和十八年十月二十五日

若殿

夜晃

(八十四)

合掌 御手紙有難う頂戴致しました。父上丹毒とのことに大変に驚きました。丹毒の恐ろしさを知りつくしているので色々想像して気をもんでいました。しかし御手紙の様子で先ず熱が下ったことが一つ、そして足の負傷がもとで、患部が頭部顔面でないこと、職掌柄、薬をちゃんと用意して帰った点などを総合してやゝ愁眉を開きました。しかし油断は出来ないから精々気をつけて介抱してあげること、この機会に動かずに、腰の養生もされるとよいと思う。よくよく父上に話してあげて、無理をせずいらぬことをせぬように言っておあげなさい。山の御法事の時来ていたとは後で聞きました。真にこの世は一寸先の知れぬものだとしみじみ思った。山の法事は兄の徳によつてそれはく、有難いものであった。

次に、正定聚の三義、因果相望、行信相望、自類相望、の中、第三をよう聞かなかつたのであつたね、自類相望とは、衆生の中に、正定聚、邪定聚、不定聚の三類がいることである。これはすでに聞いたことである。

恭敬合掌の大地において如来大悲の廻向にさめる者には、御念仏の全てが衷心の満10足より外には何もものもない。煩惱こそは御念仏の生きたまう畑である。桧舞台である。機の善悪に囚われてはならない。善悪ともに役立つ、唯現前の一念に満されて念仏させて頂く、聖人の世界に於ては念仏が報恩謝徳の念仏であるのはそのためである。業報にさしまかせ、如来の御はからいにさしまかせて、念仏させて頂くこと、それのみが、大地に生きるものたつた一つの生き方である。造る罪の宿業にあらざるはないことを知る時、生活の一一に、罪悪でさえ厳肅さを感じる。まして、如来久遠の御はからいの全てによつて、大法を聞かされ、念仏せしめられること、尊厳そのものであり、不可思議そのものである。何という不思議の因縁であろう！ 皆別れ／＼になつた日こそ、特にこのことを感じ深い感謝がわいて来る。どうか父上が早くよくなられ、一日も早く本部に帰つて来るように。私は三十日の夜六時頃に帰るようになる。例会には、帰つて来られるようになればいいかと切念しています。

父上母上によろしく。御見舞心旁一筆書き添えました。

昭和十八年十月二十八日夜（実は二十九日になつて五分）

夜晃

松中まさる様